

27Q-pm059

帝京大学薬学部1年次科目「コミュニケーション演習」の有用性評価(2)

一高齢者施設におけるコミュニケーション実習一

丸山 桂司¹, 渡邊 真知子¹, 下平 秀夫¹, ○唐沢 健¹, 戸原 明¹, 村上 勲¹,
小佐野 博史¹, 栗原 順一¹, 井上 圭三¹(¹帝京大薬)

【目的】帝京大学薬学部では、6年制薬学教育の年次進行型医療人教育として、各学年に「コミュニケーション演習」を導入している。近年、多くの学生は、世代の異なる人々とのコミュニケーションを苦手とし、人間としての経験が不足がちである。そこで、本学では、医療人としてのヒューマニズムを学ぶための早期体験学習の一環として、介護施設で高齢者とのコミュニケーション実習を行い、その有用性について検討した。

【方法】平成20年入学1年生330名に対し、学内事前学習として、信頼関係の築き方(講義およびロールプレイ形式)やOSCE形式による医療面接演習を行った後、特別養護老人ホームあるいは老人保健施設で実習を半日間行った。実習は施設利用者30名程度に学生2名の割合で実施し、学生には自発的にコミュニケーションを取るよう指導した。学習効果の評価は、実習後「将来薬剤師として高齢者にどのように関わっていききたいか」、「実習時の姿勢・態度で反省すべき点」などのアンケートを実施することにより行った。

【結果・考察】アンケート結果より、「精神面もサポートできる、相手のニーズに応えられる」薬剤師になりたい、「高齢者の一番の信頼者は家族。その家族のような薬剤師でありたい」など高い倫理観を持った学生が多かった。さらに、施設職員のスキルに関心を持つ学生も多く、チーム医療に必要な他職種の理解の一助にもなった。一方、「長髪・茶髪のまま行ってしまった」、「指示待ちになってしまった」など、身なりや行動を反省する学生も見受けられた。以上の結果より、介護施設でのコミュニケーション実習は、学習意欲の向上や医療人としての倫理観を醸成するための早期体験学習として有用である可能性が示唆された。